

2021年度
地球環境『自然学』講座
第8回

テーマ

ラオス・ミャンマー山地民の暮らしと文化

講 師

京都大学教授 竹田 晋也 先生

2021年7月24日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

竹田 晋也（たけだ しんや）



1. 経歴

京都大学農学部卒業・京都大学農学博士。京都大学農学部助手、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授を経て、2015年4月より現職。

2. 現職

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

3. 近年の著作から

「ラック」 日本森林学会 編『森林学の百科事典』丸善出版, p. 390 2021 年

「ミャンマーの周縁の森から見た相互依存の連鎖」五十嵐・酒井編『グローバル関係学 第7巻 ローカルと世界を結ぶ』岩波書店, 2020 年

「アルナーチャル・プラデーシュの生業空間」安藤編『東ヒマラヤ 都市なき豊かさの文明』京都大学学術出版会, 2020 年

「農耕文化圏と熱帯各地の農業 4.2 東南アジア大陸部」江原・樋編『熱帯農学概論』培風館, 2019 年

「カレン領域における境界画定と住民林業」奥田編『温暖化対策で熱帯林は救われるかー住民と森林保全の相利的な関係を目指してー』文一総合出版, 2017 年

「マングローブ林の地域生態史 ー生態環境論ー」河合編 『改訂版 地域の発展と産業』NHK出版 2015 年

地球環境「自然学」講座資料
2021 年 7 月 24 日（土）13 時～16 時
此花会館 3F 梅香殿

ラオス・ミャンマー山地民の暮らしと文化

竹田 晋也

東南アジア大陸部では、上流山地の常緑林は照葉樹林につながり、下流低地の常緑林は熱帯雨林につながる。その間に乾季に落葉し、雨季の到来とともに景色を緑に一変させるモンスーン林が広がっている。5 月になると南西季節風がインド洋から雨を運んで来て、あたりの景色は緑色に一変する。この変化は鮮烈な印象を与え、モンスーン林は別名「雨緑林」とも呼ばれる。

東南アジア大陸部で最も広くおこなわれてきた焼畑は、雨緑林帯での陸稲 1 年作の焼畑である。一方、照葉樹林帯の焼畑にはさまざまな輪作様式がみられる。民族集団とその生業や環境利用の方法は決して固定した関係ではないが、ここではラオス、タイ、ミャンマーの北部地域でのこれまでの傾向を把握しておこう。

ラオスでは、ラオスーン（高地のラオ）、ラオトゥン（中腹のラオ）、ラオルム（低地のラオ）の三つに人々が区分される。実際の居住域は入り込んでいるが、あえて単純化すれば、高地のラオは山地常緑林帯での焼畑（かつてはケシ栽培）、山腹のラオは混交落葉林帯での陸稲焼畑と林産物採取、低地のラオは平地での水田水稻作を生業としている。

ラオスと同様に、タイ北部でも 1960 年代までは、主に標高に沿って山地民の棲み分けが明確に見られた。山地常緑林でのモンなどのケシ畑、山地常緑林から落葉混交林にかけたカレンなどの焼畑、そして低地タイ人の補完的焼畑と異なる焼畑が見られたのである。それらを作付け期間と休閑期間の組み合わせからみると、1）短期耕作長期休閑、2）短期耕作短期休閑、3）長期耕作・移動放棄の 3 つに区分できる。

1）は東南アジア大陸部で最も広く行われている焼畑である。陸稲を 1 年作付けして、10 年近く休閑する。堀棒を使って陸稲を点播するため地表面を荒らすこともなく、またパイオニア樹種に加えて、切り株からの萌芽更新などにより休閑期間中に二次林は十分に回復する。2）は水田の初期開墾過程あるいは補完的焼畑である。竹林休閑となっているところが多い。3）は 1000m 以上の山地林で暮らすモンの人々の焼畑で、最近までケシとトウモロコシを長期間作付けした後、その土地を放棄して新たな焼畑を拓いてきた。高地に暮らすモンは、新大陸起源のトウモロコシを主食にして、ケシ栽培を続けてきた。この長期耕作は、もともと中国側から入ってきた常畑の技術とみるほうがよいかもしれない。

ミャンマー北部山地の農業については、モンスーンタウンヤ、草地タウンヤ、灌漑山地田の 3 つがある。モンスーンタウンヤでは、1 年に限り耕作され、休閑期間は 12～15 年で

ある。草地タウンヤでは、トウモロコシ、ソバ、アワ、コムギ、オオムギが輪作された後、草地休閑となる。

リーチは次のように記述している。「タウンヤ耕作と山地水田耕作が同じ地域社会で併用されている場合、人々はたいていタウンヤ耕作の方が有利だと考えているように思われる。・・・中略・・・。灌漑山地水田は、経済上というよりもむしろ軍事上政治上のものと思われる。」（リーチ 1995）これは焼畑と水田の比較を考える時に注目すべき点であり、集約化は労働生産性の犠牲の上にあるとする農業集約化論につながる視点だと思う。

以上のラオス、タイ、ミャンマーの北部地域に共通してみられるように、モンスーン帯での焼畑は基本的に単年の作付けで終わる。1年間に用地選定、伐開、火入れ、播種、除草、獣害防除、収穫の作業がおこなわれる。「選り、伐り、焼き、播き、育み、守り、刈る」という作業が、乾季と雨季の到来に合わせて来る年も来る年も繰り返されてきたのである。

雨季の山間盆地には、緑の稲原が広がる。5月から10月ごろにかけての雨期は田仕事の季節である。一方、11月から4月ごろまでは、乾期となる。焼畑の伐開と火入れの季節である。東南アジアの大陸部では、雨季と乾季が繰り返されるモンスーンのリズムに合わせて、水田と焼畑が営まれてきた。水田を営む「タイ人」は、支谷や里山で補完的な焼畑をおこなうこともある。一方で山地民も水田を営むこともあり、その点で「タイ人」と山地民は連続している。

「畑」という漢字は、火と田を組み合わせた国字である。水田を「田」というのに対して、地上部の植生を焼き払った陸田を「畑」という。中国では古くは畵狩りのために火をいれる場所を火田と呼び、後にはそれは焼畑を意味するようになったようだ。

作物の生長に必要な条件を整えるために、田では水を、畑では火の力を借りて環境を改編しているのである。

焼畑では、火入れをすることによって遷移初期の状態にリセットして、陸稲を栽培する。休閑期間中は自然の遷移進行にまかせて二次林を回復させて、再び伐開、火入れをして陸稲を栽培する。焼畑はこのような遷移系列を十数年かけて繰り返している。

水田は湛水することで、湿性遷移系列の初期段階を維持している。このように焼畑は火のちからで、水田は水のちからで、遷移初期段階にリセットしているのだ。

代表的な遷移系列は、1) 乾性遷移系列、2) 湿性遷移系列、3) 砂性遷移系列、4) 塩性遷移系列の4つであり、1が焼畑、2が水田にあたるわけだ。

焼畑では、森を焼きそして耕作跡地には森が再生してゆく、攪乱と遷移が繰り返される。そのために焼畑の森は一斉造林のように均一ではなく、焼畑、若い休閑地、古い休閑地、そして深い森というように不揃いなパッチワークになっている。この不揃いなパッチが、生きものに多様な場を与え、そしてその多様さが様々な産物を生み出してきた。

東南アジア大陸部の人々は、森林産物の交易を通じて、外部世界と結びついてきた。川の

流れに沿うように森林産物が港市に集められてきたのである。

たとえば昔日のラーンサーン王国からの輸出品でとりわけ重要だったのは、金とラックと安息香であった。それら森の産物は、人や牛馬の背に乗せられて峠を越え、河を船でくだり、アユタヤをはじめとする港市へ運ばれ、そこからさらにインド洋の向こうのコロマンデル海岸、そしてヨーロッパへと輸出されていた。産品の特徴は、長旅に耐えるように保存がきき、運びやすく、値段のよいことであった。北ラオスでは、焼畑で自給自足し、森の産物で現金収入を補う生活が何世紀にもわたって続けられてきたのである。

雲南やアッサムにつながる東南アジア大陸山地は、チャの原産地でもある。タイ・ラオス北部、ミャンマーのシャン州では、ミアン（タイ語）・ラペソウ（ミャンマー語）と呼ばれる噛み茶が作られる。生葉を蒸して漬け込んだ茶の漬け物を噛むのである。このミアン茶園では、山地林の高木を被陰樹としてその下にチャが植えられる。この茶園には、茶葉を蒸すための薪採取と噛み茶出荷のための役牛の放牧林が組み合わされてきた。ここでは牛の林内放牧が乾期の野火の進入を防いだ。

アッサムのミシム丘陵へチャの野生種を求めて調査に入ったキングドン・ウォードは次のように書いている。「チャは丘陵地の植物で、平野の植物ではない。茶の栽培や、その存在ですら、とてもよく移動するタイ族が住んでいるか、住んできた、あるいは住んでいたであろう土地の、その周辺ばかりにあるように見えるのは、重要なことではないだろうか？ 彼らの移動した長い道のりは、今でも茶の木で縁どられている。これを偶然の一致というのだろうか？」（ウォード 1999）

こうした茶園も焼畑の跡地に作られることがほとんどである。茶や沈香の栽培は、二次遷移の最後の段階を模倣しているとも考えられる。雨緑林から照葉樹林帯へと広がる山地民の世界は、さまざまな森林産物を生み出す焼畑の攪乱と遷移のパッチワークがやまなみを彩る世界である。

今回の講演では、バゴー山地のカレンとラオス北部のカムの村の事例から、雨緑林で焼畑を営む山地民の暮らしと文化を概観したい。そして、ラオスとミャンマーの最近の政治・社会・経済的な変化がこれらの村にどのような影響をもたらしているのか（竹田 2020）についても、ご紹介したい。

[引用文献]

- エドモンド・リーチ 1995 年「高地ビルマの政治体系」（関本照夫訳）弘文堂
 キングドン・ウォード 1999 年「植物巡礼」（塚谷裕一訳）岩波書店
 竹田晋也 2020 年「ミャンマーの周縁の森から見た相互依存の連鎖」五十嵐・酒井編『グローバル関係学 第7巻 ローカルと世界を結ぶ』岩波書店